

南九州地方のカタとゴッ

著者	津田 智史
雑誌名	言語科学論集
巻	14
ページ	65-77
発行年	2010-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10097/50681

南九州地方のカタとゴッ

津 田 智 史

キーワード: 南九州地方、アスペクト表現、カタ、ゴッ、文法化

要 旨

南九州地方では、ヨル形、トル形とは別にカタ・ゴッというアスペクト表現がみられる。このカタ・ゴッという2形式は、元来はそれぞれ「方」、「如し」であったと推定される。南九州地方での臨地面接調査から、この2形式の用法を確認し、どのような過程を経てアスペクト表現へと文法化していったかについて考察した。カタは動詞を名詞化するものから動作性・過程性が前面に表されたものであり、ゴッは様態表現から「している」場面をも含意するようになったものと推測される。この2形式はそれぞれ異なる過程で文法化を起こしたものと捉えられる。

1. はじめに

日本語諸方言におけるアスペクト表現研究は、近年盛んに行われている。中でも、西日本諸方言はほぼ共通の体系をもち、ヨル・トルという形式が主にアスペクト的役割を担うとされる。しかし、本稿で取り上げる南九州地方(鹿児島県・宮崎県南部)では、その2形式の他にも、カタ・ゴッといった形式が少なからず確認できる。ところが、南九州地方(特に鹿児島県)でのアスペクト表現の詳細な調査報告はほぼみられず、カタ・ゴッについても、その存在には触れられるものの詳細な記述は見受けられない。そこで、本稿では2009年に行った南九州地方での調査(全34地点、計47名)をもとに、カタ・ゴッ両形式の用法を確認する。また、この両形式は熊本県など九州地方の近隣地域ではみられない形式であり、元来はアスペクト表現形式ではなかったものと考えられる。それぞれの原形を、カタは「方」、ゴッは「如し」と想定し、どのようにアスペクト表現形式へと文法化し、また意味の拡大をしていったかについて考察する。

2. 先行研究におけるカタ・ゴッに関する記述

まず、先行研究において南九州地方におけるアスペクト表現形式の分布を確認し、隣接地域ではみられないアスペクト表現としてのカタとゴッがどのように記述され

ているのかを確認する。

広く地理的に同地方のアスペクト表現について調査されたものに、国立国語研究所編(1999)『方言文法全国地図(以下GAJと略記)第4集』や九州方言学会編(1969)『九州方言の基礎的研究』がある。GAJ第198図「散っている(進行態)」の分布図を簡略化して図1に示す。図1は、桜の花が今散っている最中の状態をどのように言うのか示したものである。鹿児島県下では、「おる」相当の「オイ」がよくみられ(藤原2000など)、また「靴、首、釘、来る」などがすべて「クッ」と発音される音訛現象もあり「おる」も「オッ」と実現される。図1でもヨル、ヨッ、オル、オイ、オッや、テオルに由来するトル、チョル、チョイ、チョッなどの形式がみられたが、本稿では、それぞれヨル形(▼)、トル形(／)と示す1。図1をみると、このヨル形、トル形の2形式が南九州地方に広く分布していることが窺える。一方、カタ・ゴッの形式も確認できる。宮崎県、鹿児島県境から鹿児島湾にかけてチーカタ(●)がみられ、薩摩半島の先端にチゴッ(□)が一件確認できる。平山・木部ほか編(1997:p18)には、鹿児島県下では「古くは「オッ」「ゴッ」で進行態を、「チョッ」で已然態を表し、両者の区別があったが、現在は「チョッ」が両方の意味を表す」との記述があり、周囲論的にも地理的周縁部にあたる薩摩半島の先端にゴッという古形を残している可能性は考えられる。

凡例	▼ ヨル形	／ トル形	● カタ	□ ゴッ	+ その他
----	-------	-------	------	------	-------

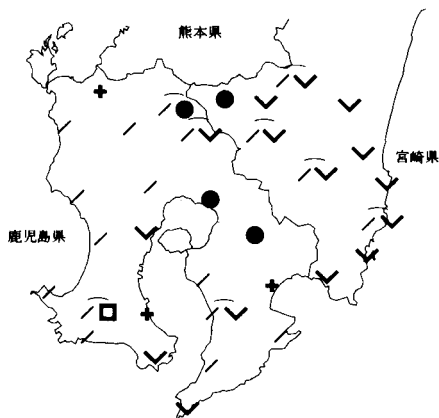


図1²GAJ「散っている(進行態)」

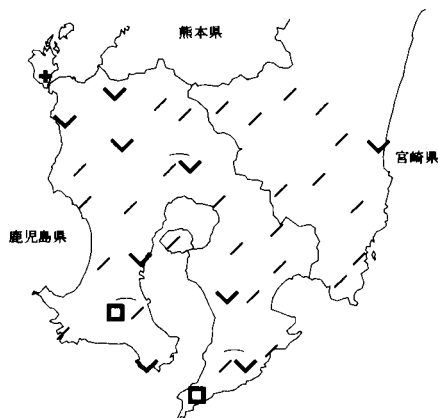


図2九州方言学会編「降っている(進行態)」

九州方言学会編(1969)では、「いま、雨が降っているのを、雨がどうだと言いますか。」という質問を、老年層と少年層を対象に九州地方全域(本稿の対象地域としては鹿児島県25地点、宮崎県南部11地点)で調査を行っている。「降る」は、人が主体でないものの動作として、GAJの「散る」と比較しうるものと考える。老年層の結果を示した図2では、薩摩半島先端の知覧町、大隈半島先端の佐多町の話者がゴツ(□)を使用していることがわかる。少年層では知覧町、佐多町だけでなく大隈半島の内之浦町でもゴツがみられる。また、老年層の結果ではカタ(●)はみられないが、少年層では知覧町の話者はカタを併用している。

次に、この地方の文法項目をまとめた先行研究において、カタ・ゴツが同地方のアスペクト表現としてどのように記述されているのか確認したい。南九州地方のアスペクト表現について触れたものとしては、上村(1954・1968)、木部(1990・1996)などがある。上村(1968)では、進行態をオルで已然態を Chol で示すとする鹿児島県下のアスペクト表現を示し、ゴル(本稿のゴツと同義)はオルからの音訛形であるとする。また、上村(1954)では薩隅一般で人の動作について言う場合にのみカタが使用されるとする。木部(1996)でも、宮崎県都城市で動作の進行過程の場合にカタの使用が盛んであることを示している。いわゆる薩隅方言区画において、アスペクト表現としてのカタが報告されていることがわかる。特に木部(1990)では、鹿児島県方言におけるカタの使用世代、承接する動詞分類にも言及がある。しかし、多くの先行研究では南九州地方のアスペクト表現としてヨル形、トル形を中心に扱っており、同地方特有のカタやゴツの用法やこれらの形式の地理的広がりを詳しく扱った記述はほぼみられない。

3. カタ・ゴツの分布と用法

ここでは2009年に南九州地方で行った調査結果(以下、2009年調査)をもとに、当該地域で使用されるカタ・ゴツの分布と用法を確認し、その用法からこの2形式の文法化の過程を想定する。

3-1. カタ・ゴツの分布

調査ではいくつかの動詞に関し、場面を変えながら使用する形式を回答してもらい、ヨル形・トル形・カタ・ゴツのそれぞれを使用するかの確認を面接形式で行った。そのため、話者一人当たりの回答形式が多くなっている。地図化する際には、使用す

ると認められた形式全てを併用として分布に反映させている。調査は、テンス現在についてのみ行った。調査概要は次頁の通りである。

《第1回調査》 2009年2月26日～3月31日

調査地点：南九州地方全34地点（鹿児島県24地点、宮崎県南部10地点）

インフォーマント：計47名（60代以上46名、～50代1名／男性33名、女性14名）

調査者：津田智史ほか東北大学大学院生2名

《第2回調査》 2009年8月13日

調査地点：鹿児島県指宿市

インフォーマント：計2名（60代男女各1名）

本稿では先行研究との比較のため「(花が)散る」の動作進行過程の結果を図3として示す。図3をみると、西日本諸方言と同じくヨル形(▽)、トル形(/)が広範囲にみられ、カタ(●)もかなり広い範囲(いわゆる薩隅方言の地域)で使用されていることがわかる。また、薩摩・大隅両半島の先端にはゴツ(□)がみられる。先行研究及び図3を通じてほぼ同じ地域でゴツが確認されたことから、この地域特有の形式であることが窺える。

図3からは、カタは南九州地方のアスペクト表現として十分に市民権を得ていることが窺える。ゴツについても、地理的周縁部にあたる薩摩・大隅両半島先端地域でアスペクト表現としての使用が確認できる。では、具体的にカタ、ゴツはどのような状況を表しうるのか。他の西日本諸方言ではみられないこの2形式の語源はなんだろうか。それぞれの使用される場面をみていき、用法と語源を確認したい。

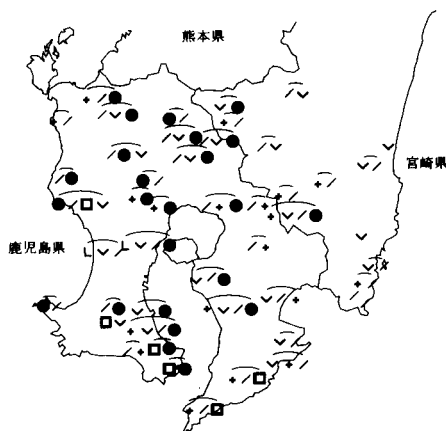


図3 2009年調査「(今まさに) 散っている」

3-2. カタの用法と語源

まず、カタの用法についてみていこう。カタは、動詞の連用形に接続しているが、それ自身は活用せず接尾辞的である。2009年調査において、カタは図3で示したような動作の進行過程での使用がほとんどであった。それ以外では、反復習慣、将然でも使

用が確認できる地点も少なからずみられる。以下、場面それぞれの例文と話者の内省とを併せてみていく。

- 1) (家にいると、お客さんが来て、奥さんはどこかと尋ねられました。今は散歩に行き、田んぼの方を歩いていると教えてあげます。)

タンボンホー アユンカタジャッド。

田んぼの方を 歩いていますよ。 (鹿児島県日吉町・男性)

ほぼすべての話者が、カタは動作の進行途中、「(今)～している」状態を表すと内省している。ただしこのとき、「赤ん坊が、2本足で今歩いている」というのはカタで表しづらいという。まだしっかりと歩く動作を継続できない赤ん坊には使用しづらく、大人が散歩するように、ある程度距離・時間がコンスタントに続いていくことが確実な場合の方が使用しやすいという内省を得た。また、見ている様子、状態を言い表すときに使用しやすいという内省も聞かれた。

- 2) ココニサンニチワ フイカタジャッド。

ここ2、3日は (雨が)降っているよ。 (鹿児島県薩摩川内市・男性)

木部(1990)がカタの反復習慣の用法を指摘しているように、2009年調査でも反復習慣での使用が確認できた。ただし、話者から、することが常に決まっている習慣、もしくは動作が継続していることを強調した場合に使用しやすいという内省が得られた。進行から反復習慣へのアスペクト的意味の派生は広くみられるものであるが、カタにおいては動作が続いているということがより重要度を増す。そのため、「6月にはいつも雨が降っている」という場面では使用できない(6月だからと言っていつも雨が降っているわけではないから)が、2)のように「ここ2、3日降り続いている」という場合ならばカタが使用できるという³。不確かな反復事象では使用できず、より連続性が明確で確実に続いている場合に使用されやすいようである。

- 3) (お母さんが)マドー アケカタナー。

窓を 開けようとしているなあ。 (鹿児島県栗野町・男性)

このように、動詞の運動自体が開始されていなくてもその直前段階(将然)で使用可能である。この用法の使用者はあまり多くないが、「確実に窓を開けようとしている」など特定の動作を行うことが明白である場合に使用可能とする内省を得た。

また、カタはアスペクト表現としてだけではなく、九州地方では同時並行の動作を表す接続助詞「ながら」の意で多用される。九州方言学会編(1969)では、「歩きながら話す。」というときの「歩きながら」をどのようにいうか聞いた調査から、南九州全域でカタ(デ)といった形を確認できる。各地方言辞典でも、この用法の記述がみられる(橋口満著1987『鹿児島県方言辞典』桜楓社、原田章之進1979『宮崎県方言辞典』風間書房など)。カタデは、「アユンカダツプナ。(歩きながら食うな。)」(九州方言学会編1969:p506)というように、「歩く」というような人主体の動作を状態化し、その状態にあって「食べる」のを禁止する。そこから、人がある動作をしながら別の動作を行うというように用いられるのである。ひるがえって2009年調査の結果をみると、カタは動作の継続状態であることを表している。それはつまり、動作が進行過程にあることを言い表しているのである。また、カタの使用はアケカタ(開けている)やアユンカタ(歩いている)、クカタ(食っている)など、人の動作の場合に多くみられ、雨がフイカタ(降っている)やバスがキカタ(来ている)などでは使用にばらつきがみられた。内省でも、人が動作を行っている様をいう時、意志を持って行動する時など、人が主体の場合に使用するという認識があるようである。前述したように、上村(1954)にも「薩隅一般に人の動作にだけついて言うのにはカタという語を連用形に添えて」言うところ。同時並行の動作の状態を表す文中の表現から、動作の進行を表す文末の表現へと変化した可能性は多分にある。また、図2(九州方言学会編1969)→図1(GAJ 1999)→図3(2009年調査)の分布の変化をみると、現在では無生物が主体のものにも使用を拡大している様が窺える。

ここまでみてきたように南九州地方では、アスペクト表現としてのカタを認めることができそうである。しかし、2009年調査をはじめ図1、2などでも南九州地方の北東部、宮崎県宮崎市の周辺や同県南沿岸部では、このようなカタの使用は確認できない。ただし話者の内省では、ノンカタ(飲み会)、クカタ(食べること)など、限られた語のみ名詞的な使用がみられる。この名詞的なノンカタ(飲み会)は、宮崎県北部若年層からも筆者は傍受したことがあり、鹿児島県から宮崎県にかけてかなり広い範囲で使用されるものと思われる⁴。上村(1954)には、一般には継続を表すが、「温泉ニイッカタジャッタ(温泉行きをした)」のように、場合によっては継続を示さないこと

もあるとする。このような名詞的なカタは2009年調査からも多く見受けられ、南九州地方でかなり使用されている。

つまり南九州地方で使用されるカタには、アスペクト表現的なものと名詞的なものがある。これらは名詞的なものからアスペクト的意味を獲得していったものと考えられる(後述)。同地方のカタは、「打ちかたやめ」や「事件の調査かたを頼む・への指導かたお願いします」など、動詞の連用形や漢語名詞に付いて、これをするという意味を表す(2001『日本国語大辞典第二版』小学館)ものと同様、「方」が出自だと考えるのである。

3-3. ゴツの用法と語源

次にゴツについてみていく。ゴツは動詞の連用形に接続し、先行研究ではゴツ自身もラ行五段相当の活用を持つことが指摘されており助動詞的である⁵。用法は進行過程とされるが、2009年調査からは少数であるが将然や反復習慣でも使用可能なことが窺えた。ここでは、ほぼすべての動詞においてゴツを使用可能であった鹿児島県田代町の男性話者の回答をみていきたい。

4) (目の前で歩いているのをみて)アユンゴッド。

歩いているよ。

ゴツの使用者のほとんどが進行過程での使用を回答している。特に、田代町の話者からは人に教えるときに使用しやすいという内省を得ている。

5) ログガツワ アメ フィゴツ (ドヨ)。

6月は(いつも) 雨が 降っている(よ)。

同じく反復習慣で使用可能であったカタとは異なり、「6月」は梅雨でいつも雨が降っているであろうことをゴツで表現するが、「ここ2、3日」続く確実な事実であるとゴツは使用しづらいようである。これは、後述するゴツの語源にかかわってくるものと思われる。

6) マド アケゴットカー。

窓を 開けようとしているのか。

将然の場面を聞いた場合、ゴツで回答する話者はほとんどみられなかった。これはアスペクト表現一般でもそうであるが、将然という状況が捉えづらいことに問題があるであろう。そのため、カタのところでも内省にあったように、「開ける」など窓に向かうことで特定の動作を行うことが確実に予測できる場合に使用が可能になるものと思われる。さらに、ゴツは将然では使いづらいが、「(空が暗くなって雨が)降りそうな様子」を言い表す場合、フィゴツジャと使用するという。つまり、ゴツには、様態表現としての意味合いが含まれているのである。これはGAJ第5集第241図「雨が今にも降りそうだ」で、ほぼ2009年調査と同一地域でゴジャツという形式が使用されていることから窺える(図4)。

凡例	□ ゴジャツ	◇ ゴタル
	◇ ゴツアル	□ ゴチャツ
	□ ゴツシヨール	
Y	ソナ	Y ソナフ
人	ヨナフ	N 無回答

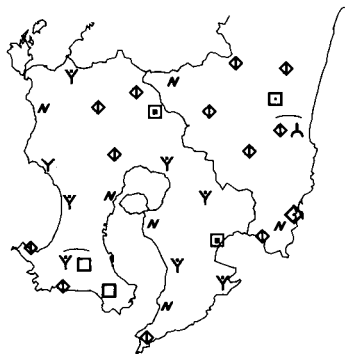


図4 GAJ「雨が今にも降りそうだ」

ところで、このゴツの出自はなんであろうか。存在動詞オルからの音訛とする説がいくつかみられるが、ゴツの出自に関しては先行研究でも触れられることが少なく、その実態は明らかではない。存在動詞由来とされるのは、オルに形が似ていること、またラ行五段活用とされるためであろうが、積極的な理由を述べたものは少ない。ここでは、諸説あるうち音声面から言及している瀬戸口(1987)と上村(1968)の説を挙げてみたい。瀬戸口(1987:pp120-121)では、カ行五段動詞が動詞の末音尾節と同化音声を取り、イキオル(行きオル)がイゴルへと音相を変化させる例を挙げ、その後カ行動詞以外の連用形+オルの形も類推からゴルへと変化する場合があるとする。しかし、イキオル→イゴルの変化は理解できるものの、それがカ行以外の動詞に影響を与えるという点で無理があるように思われる。一方、上村(1968)は、「先行の連用形の母音とオルのオとの母音が重複するので、避けてこれをゴルと発音する」と述べている。しかし、こちらも母音の連続を避けるために[g]を選択するというのは、発音の負担が増えている分実現が難しいように思われる。このように、瀬戸口説も上村説

も、どちらも説得力に欠けるものである。そのため、後藤(1994:p89)のように、ゴツとオツは同じ動詞の連用形に接続するが、細かくみると接続の仕方が異なることを指摘し(ネゴツとネッオツ:寝ているなど)、それぞれを別のものとして扱っているものもあるが、ゴツの出自については触れられていない。また、カタの語源が「方」であるように、このゴツの語源が名詞の「事」ではないかという考えもできる。そうすると意味や用法的には解釈しやすいように思われるが、名詞由来のカタが活用を持たない一方でゴツは活用を持つとされることから、ゴツは名詞由来ではないと捉えられる。

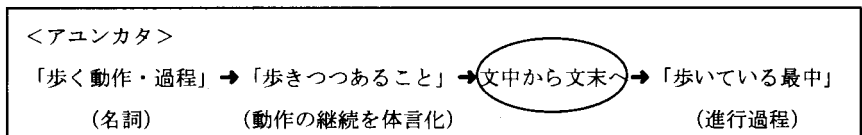
そこで、もう一つ南九州地方で広く使われる語形からゴツの出自の可能性を探ってみたい。同地方言では、「如し」の語幹であるゴトを用いて「ように。ごとく。」の意を表す(『鹿児島県方言辞典』)。このゴトは様態表現であるが、後に「ある」「している」を導いて将然を表す。上村(1954)では、「西北薩では、切ルッゴツシトー」を好んで使用するという報告もある。このような使い方から徐々にゴトだけでも将然を表すことが可能になり、さらに時間的隣接場面の進行過程をも表すように変化したものとして考えることができよう。しかし、ゴトは後に「ある」「している」などを導きやすく、ゴトがゴツとして単独で用いられることはあるのか。この点に関しては先の図4をみてもわかるように、様態表現で「ゴジャッ」、すなわちゴツ+断定という形での使用が確認できる。また様態表現に近い用法の比況表現のゴツに関して、瀬戸口(1987:p114)では慣用的な表現ではあるが、「ヨガバイノゴツ。(さもないことでもあるかのように(得意になっているが。))」といった表現が使用されることを報告している。このことから、ゴツは「如し」からの変化である可能性は十分に考えられる。そして、進行過程を表すものとして定着したゴツは、存在動詞オツに似た形から類推され、終止形としてゴルあるいはゴイという形が想定されて、活用までも獲得していったものと思われる。

4. カタ・ゴツの文法化について

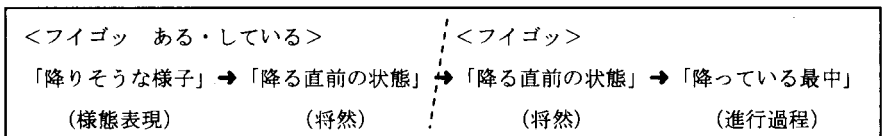
以上から、本稿ではカタ・ゴツはそれぞれ「方」・「如し」が出自であると考ええる。この2形式は、ともに動作の進行過程を表す形式といえる。ただし、これらの形式がアスペクト表現として使用されるようになった過程には違いがある。

カタは、かつてはアクチュアルな動作ではなく名詞的に動作自体を表すものとして使用されていたが、そこには動作性や過程性など時間的幅というものが読み取れる。そのため、「打ちかたやめ」のように鹿児島地方では「しつつあることを体言化す

る」(都竹1980)形式として使用されるようになったと考えられる。さらに、カタは「動詞の持つ動作の面に呼応して、動作を事柄として表したり、継続として表したりする」(木部1990)とあるように、徐々にそこに内包する「動作をしつつあること」が強調され、同時並行表す接続助詞として使用されるようになり、文末でも使用可能になったものと捉えられる。そして、アスペクト表現と同様の地位を得て動作開始の直前(将然)をも派生的に表すことができると考える。なお、現在ではチーカタ(散っている)など距離・時間的に幅を持つ場合には、無生物主体の動作進行過程にも使用が可能になっている。



一方、ゴッは先行研究ではオルからの音訛形とされることが多いが、出自を「如し」であるとすると、元々様態を表す形式の「ごと ある(ようだの意)」から実際にまだ動作の進行過程には至っていない(が直前である)将然で使用されるようになり、そこから、「ごと」単独でも将然を表すようになったと捉えられる。そして、「しそうだ」の時間的隣接場面であり、将然の後に起こる実際に「している」場面をも想定・含意して、現在のように進行過程でも使用が可能になったと考える。ただし、2009年調査からは将然での使用はほぼみられないが、これは一般的なアスペクトの将然用法の場合とも同様に、特定の動作を行うことが予測できる動詞でないと使用しづらいためであろう。そのような一部動詞以外は様態表現に近い意味で使用される。



このようにカタとゴッは、それぞれ別ものからアスペクト表現へと文法化しており、その過程は異なる。それぞれの過程を図5に示す。カタは名詞的に使用されたものが文法化してアスペクト表現として使用されるようになり、ゴッは様態表現であったものがアスペクト表現へとシフトしていったと考えられる。

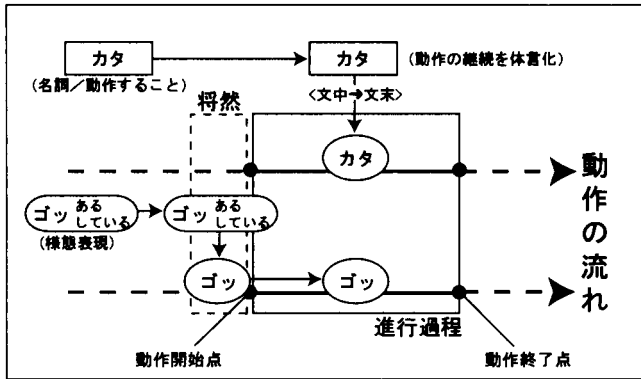


図5 カタ・ゴッの文法化

5. おわりに

本稿では南九州地方でみられるカタとゴッのアスペクト表現形式への文法化の過程を示した。ただし、そのアスペクト表現への文法化の過程、また用法の拡大という点でカタとゴッは異なる道を辿っている。

・カタは、本来「アユンカタ(歩き回ることの意)」のように動詞に下接することで動作を「すること」として名詞的に示していたが、徐々にそこに内包する動作性・過程性に焦点があたるようになり、動作の同時並行を表す接続助詞としての表現を挟み、文末で進行過程の動作をも表すようになった。また、図2(九州方言学会編1969)→図1(GAJ 1999)→図3(2009年調査)のカタの広がりを見ると、用法の拡大という点では比較的新しい変化であることが窺える。(名詞→アスペクト表現)

・ゴッは、元々様態を表す形式の「ごと ある(ようだの意)」から変化し、まず将然で使われるようになり、時間的隣接場面である実際に「している」場面をも想定・含意して進行過程でも使用が可能になった。また、薩摩・大隅両半島の先端で固まって使用が確認されることから、かなり古い段階で文法化を起こしていたことが窺える。(様態表現→アスペクト表現)

・進行過程で使われるようになったこの2形式は、現在ではカタは人主体の動作の将然や反復習慣、無生物主体の進行過程へ、ゴッは反復習慣へも意味を拡大させている。

以上のように、カタとゴッの語源はそれぞれ「方」と「如し」とであると考えられる。しかし、ゴッについては先行研究でラ行五段の活用体系を持つものとされており、存在

動詞「おる」由来とする考えも現段階では完全には拭い去れない。2009年調査では主にテンス現在の文末での用法のみの確認にとどまっており、今後テンス過去・未来の使用や、活用体系の構築も含めさらに詳細な調査を行う必要がある。また、本稿では、カタ・ゴツの文法化という側面に注目したが、この2形式が果たしてどのようにヨル形、トル形とアスペクト的意味のすみわけを行っているのかの考察までは至らなかった。これらのアスペクト表現を包括した同地方のアスペクト体系構築が今後の課題となる。

注

¹ 上村(1954)や木部(1990)などでは、テオル(トル形)相当のッオツが確認されるとあるが、本稿で示す図は動作の進行過程について質問されたものであり、西日本諸方言一般においてヨル形が優勢な局面である。2009年調査でも動作結果の局面で(ッ)オツという形式が何地点かでみられたが、直前に促音が入るものと入らないものがあり、現段階での区別が難しいためここでは全てヨル形として記号を与えている。

² 以下、言語地図の作成に当たっては、国立国語研究所ホームページ「方言研究の部屋」で公開されているブラグインソフト(lms)を使用した。

³ 同じようにヨル形、トル形は進行や反復習慣で使用されるが、「6月にはいつも～」や「ここ2、3日～」のどちらでも使用可能である。カタとこれらの形式の表現する側面が異なることが窺える。

⁴ カタは、2009年調査では宮崎県南部でも薩隅方言地域でしか確認できなかったが、清武町の80歳以上で「ナンゴツナー（何ごとですか）」「医者イッカタジャ（医者に行くところだ）」などを使用するという情報もあり、さらに調査対象の年齢を上げると宮崎県下でもアスペクト表現に近いものを確認できる可能性がある。また、南九州地方以外でも東北地方の山形県、宮城県などで使用されるという確認がとれている。ただし、東北地方では「(お皿を)フキカスル」(何枚もお皿を拭いている)のように繰り返すという点に焦点があり、また他に述部を後接しないと使用できない。

⁵ 柴田(1959)は、鹿児島県姶良町でみられる「しつつある」の意を表す接尾形(助動詞)ゴイという形式として取り上げ、ラ行五段動詞「取る」と同じ活用をとり、動詞の終止形や完了形(連用形)に接続するとしている。後藤(1994:p233)でも、鹿児島市で進行継続を表すゴツという助動詞としてラ行五段の活用体系を示している。ただし、橋口(1987:pp45-46)では、終止形ゴツ・連体形ゴツ・仮定形ゴレの活用しかないとしており、2009年調査でもゴツの活用体系を築くには至っておらず、今後の課題となる。

参考文献

- 上村孝二 (1954)「鹿児島懸下の表現語法の覚書」『文科報告』3 (井上史雄ほか編『日本列島方言叢書27九州方言考⑤(鹿児島県)』ゆまに書房, pp. 141-150に再録).
- 上村孝二 (1968)「南九州方言文法概説—助動詞・助詞—」『薩摩語』12 (井上史雄ほか編『日本列島方言叢書27九州方言考⑤(鹿児島県)』ゆまに書房, pp. 201-211に再録).
- 木部暢子 (1990)「鹿児島方言の語法—「カタ」と「ジ」—」『筑紫語学研究創刊号』筑紫国語学談話会, pp. 65-71.
- 木部暢子 (1996)『鹿児島市とその周辺地域における地域共通語の実態とその教育に関する研究』科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書.

- 九州方言学会編 (1969)『九州方言の基礎的研究』風間書店.
- 国立国語研究所編 (1999・2002)『方言文法全国地図第4・5集』大蔵省(財務省)印刷局.
- 後藤和彦著 (1994)『鹿児島県方言の語法研究』.
- 柴田 武 (1959)「14鹿児島県揖宿郡頰娃町」『日本語方言の記述的研究』明治書院, pp. 315-342.
- 瀬戸口俊治 (1987)『南九州方言の研究』和泉書院.
- 都竹通年雄 (1980)「全国方言のテンスとアスペクトについて」『言語生活』342 筑摩書房(『都竹通年雄著作集 第2巻文法研究篇』1996 ひつじ書房, pp. 91-103所収).
- 橋口満著 (1987)『鹿児島県方言辞典』桜楓社.
- 平山輝男・木部暢子ほか編 (1997)『日本のことばシリーズ46 鹿児島県のことば』明治書院.
- 藤原な一 (2000)『統昭和(→平成)日本語方言の総合的研究第5巻日本語方言文法』武蔵野書院.

※本稿は、平成22年度日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

また本稿は、日本語学会2009年度秋季大会(於島根大学)での発表をまとめたものである。発表、論文化に際して、ご質問・ご助言いただいた方々に記して感謝申し上げます。

— 東北大学大学院生・日本学術振興会特別研究員 —